

この子らを世の光に

写真は朝日新聞 6月2日 1面の哲学者・鷺田清一さん執筆「折々のことば」である。

1面左下に連載され、いつも目にしているが、今回はタイトルに引きつけられた。

糸賀一雄さんのことはあまり知らなかった。この記事を読んで、名大図書館で『糸賀一雄著作集』をさがし、早速目を通した。著作集Ⅲ（日本放送出版協会、1983年）に、次のような指摘があり、書き写しておきたい。

この子らはどんなに重い障害をもっていても、かけがえのない生命をもっていて、かけがえのない個性的な自己実現をしているものです。人間と生まれて人間となっていくのです。その自己実現こそが創造であり、生産であるのです。私たちのねがいは、重症な障害をもったこの子たちも立派な生産者であるということ認めあえる社会をつくらうということです。「この子らを世の光を」あててやろうというあわれみの政策を求めているのではなく、この子らが自ら輝く素材そのものであるから、いよいよみがきをかけて輝やかそうということです。

「この子らを世の光に」です。この子らが生まれながらにして持っている人格発達の権利を徹底的に保障せねばならぬということなのです。障害をもった子どもたちはその障害と戦い、障害を克服していく努力のなかに、その人格が豊かに伸びていくのです。

私が「この子らを世の光に」といったのは、世の光として自前で生きている姿、太陽や星のように自分自身で光っているということです。重症の子どもたちは自分で光れないと考えられていたのですが、実は自分で光っていました。おしめを毎日取り替えられている一人の重症の青年が、ある日、力んで、力んで、一所懸命腰を持ちあげていました。その力が電気のように手に伝わって保母さんはハッとしました。丸太のように寝ているだけだと思っていたのにそうではなかったのです。伝わってくるその響きに生命というものを感じさせられたのです。その喜びと驚き。これこそ自己表現、自己実現の姿なのです。これが生産でなくて何が生産なのか、ということです。生産教育というものは、そういうような生産が支えられる世界をつくっていくことだと思います。

(2015年6月6日)

